九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

地元を出る/帰るの社会学

陣内，未来
九州大学教育学部 ： 学部生

和田，千夏
九州大学教育学部 ： 学部生

徳永，真直
九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻 ： 修士課程

高倉，維
九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻 ： 修士課程

他

https://doi.org/10.15017/4773104

出版情報：九州大学教育社会学研究集録. 23, pp.65-80, 2022-03-15. 九州大学大学院人間環境学府教育計画・測定評価論研究室
バージョン：
権利関係：

地元を出る/帰るの社会学 1)

Sociology of Leaving / Returning to The Hometown

陣内 未来・和田 千夏・徳永 真直・高倉 維・木村 拓也

序 地元愛着度、地元志向度の要因分析

第 1 項 問題の所在：「地元を出る/帰る」動機は何か

「地元を出る」これは多くの人が人生において経験をすることであろう。しかし、出ていく人ばかりになると、地域にとっては死活問題である。人がいない地域は消滅していってしまう。地域を守るためには出ていく人を止め、出ていった人には帰ってきてもらわなければならない。このような過疎地域は、総務省の報告書（総務省地域力創造グループ過疎対策室「過疎地域等における集落の状況に関する現状把握調査報告書」令和 2 年 3 月）によると、沖縄を除く九州圏が 22.9%と全国で最も高い割合となっている。九州は持続の危機にさらされた地域が多くある。また、過疎地域とされる集落は全国で見ると全体の 61.2%が中山間地にある（総務省地域力創造グループ過疎対策室,2020）。ここで、「人が住まない地域＝田舎」という仮説が生まれる。過疎地域に人を呼び戻し、地域を守っていく上で「人は都会に住むのがいいのか、田舎に住むのがいいのか」という議論は避けて通れない問題であると思える。都会に住むか田舎に住むかの議論は、資本主義社会の中に身を置くか否かで語られがちであるが、住みたいと思うまち（本文では読者の先入観を取り除くため、以下表記を「まち」と統一する。）を選ぶ基準は本当に経済的な視点が一番大きいのだろうか。まちから人が出ていくのを防ぐためには都市化する、若しくは観光地化して経済的な発展をするしかないのだろうか。これまでの国の過疎対策法を見てみると、昭和 54 年度までは目的として「住民福祉の向上」と「地域格差の是正」が挙げられており、昭和 55 年度以降は「雇用の増大」が加えられ、地域の人口を維持し、増やして過疎化を食い止めるために利便性と経済面の保障が意識されていることが伺える。しかし、平成 12 年度以降、「美しく風格ある国土の形成」という目的が追加されている（総務省地域力創造グループ過疎対策室,2017）。また、「過疎地域＝田舎」は生活が不便かというと、水道や水洗トイレ、診療施設や通信環境は整備が進んでいる地域も増えてきた。過疎地域でも水道普及は 90%、水洗化率も 74%を超えている（総務省地域力創造グループ過疎対策室,2017）。これらのことから人々が「地元を出る/帰る」動機は生活利便性や経済に留まらず、複雑な要因が絡まり合っているのではないかと考えられる。

第 2 項 先行研究 ソーシャル・キャピタルと地域愛着、地域振興意欲の醸成

これまでに地元愛着度や地元志向度の規定要因を検討した研究は都市計画論や土木工学の中で行われたものが殆どである。西村・南條(2017)では静岡県島田市への愛郷心と定住意向を中学生と高校生へのアンケート調査から検討している。その結果、地域の親切さや温かさや人間関係といった地域のソーシャル・キャピタルへの満足度、自分や家族の健康への関心度が島田市への好感度につながり、定住意欲へと影響を及ぼしている点が指摘された。前者のソーシャル・キャピタルという点については、鈴木・藤井(2008)がより具体的な研究を行っている。鈴木・藤井(2008)は、家の近くに商店街や小規模スーパー等があることで買い物中のコミュニケーションが生じ、地域愛着を高めると報告している。即ち、地域の都市機能によって人々のコミュニケーションの活性化がなされ、地域愛着を醸成するという。山口県長門市俵山地区を対象とした新里・中島・安藤(2018)では住民の人柄や交流、行政への印象、治安のよさ、観光客等との交流機会といった「社会に対する印象」と「居住年数」が地域愛着に直接的な印象及ぼすことが指摘されている。

これらは特定の地域に限定した研究であるが、限定せずに全国を対象とした研究に小塚(2009)がある。小塚(2009)によれば、定住意識は年齢とともに強くなり、年代によって居住環境に特徴がある点を指摘している。例え

ば、20・30 代は「年施設への近接性や利便性の良さ」、40 代以上は「居住地の安全性や水準といった空間の魅力」を求めているという。これらの知見を踏まえ、「人々の地域への定住化を図ろうとするならば、単に人を集めることを考えるのではなく、どのような人がどれだけ住むべきか、つまり、『居住者の数(=量)』だけでなく、『居住者属性のバランス(=質)』、そしてこれを支えることの可能なサービスを考慮した戦略的な計画」(小塚,2009)が求められると総括している。

また、地域のまちづくりに着目した実証的研究に富沢(2013)がある。富沢では島根県隠岐郡海士町の地域づくりの「成功」要因を検討している。富沢(2013)では地域づくり成功の要因として、若手行政職員による主体性、I ターン者による活動が紹介されている。このような人々による地域づくりが海士町を活気のあるものとし、次なる地域住民を主体とした地域づくりを盛り上げているとしている。中村・星野・中塚(2009)では兵庫県神河町を対象として、地域の課題解決能力の構成要素としてソーシャル・キャピタルに焦点を当てた研究を行っている。その結果、ソーシャル・キャピタルの有効性を示すと同時に、集落全体としてソーシャル・キャピタルの度合いが低かったとしても、ソーシャル・キャピタルを幅広く持つ中心的な人物が存在することで、集落のパフォーマンスが発揮できる可能性が指摘されている。

上記の先行研究からは地域の愛着や振興に影響を与える要因として、ソーシャル・キャピタルを挙げる研究が多いことが分かる。しかし、地域愛着や地域の振興に影響を与えるソーシャル・キャピタルの具体的な姿まで描けていない点にまだまだ課題があると指摘できる。即ち、どのような人とのつながりが地域の愛着や振興への意欲を醸成するのだろうか。ソーシャル・キャピタルの具体的な像を描くという次のステップに取り組んだ研究は管見の限り見当たらない。また地域への愛着や地元志向には当然、人間関係だけではなくまちの環境などの様々な要因が考えられるが、これらを網羅的に扱った研究も少なく、検討の余地が残されているといえよう。

これら地域の愛着や地元志向の研究は、特定の地域に根差したものが多い為、どうしても調査対象地域の特徴を踏まえた研究手法となりがちである。故に、様々な要因が総合的に分析されてこなかったと言える。

第 3 項 本稿の課題：地元愛着度や地元志向度は何に起因するのか

地元愛着度や地元志向度が何に起因するのか、人々が「住みたい」「帰りたい」と思うまちはどのようなまちなのか、社会的ネットワークやまちの環境、人間関係や学校での経験など様々な視点から検討していく。

第 1 節 地元愛着度と地元志向度の探索的分析

本節は、大学生を対象とした質問紙調査により取得したデータを探索的に分析することで、大学生がもつ地元愛着度、そして地元志向度について大学生の属性により何かしら差が生じていないか検証することを目的としている。

第 1 項 分析に用いた変数について

地元愛着度の指標としては、質問項目「あなたは地元に愛着がありますか？」(Q24) に対する回答（１＝まったく愛着がない～７＝とても愛着がある）を用いており、地元志向度の指標としては、質問項目「あなたは将来的に地元に住みたいと思いますか？」(Q25) に対する回答（１＝まったく住みたくない～７＝とても住みたい）を用いた。回答者の属性は性別(Q1)、兄弟姉妹の有無(Q9)、出身地外へ進学した兄弟姉妹の有無 (Q10)、浪人経験の有無 (Q1) に加えて、「あなたの出身県と市区町村をお答えください」(Q3)、「就職時に住みたい都道府県をお答えください」(Q7)、「人生の中で最後に住みたい都道府県をお答えください」(Q8) の３つの質問に対する回答パターンから作成した。「就職時に住みたい都道府県をお答えください」に対して、出身と異なる都道府県を選択している場合は「就職移動群」、また、「人生の中で最後に住みたい都道府県をお答えください。」に対して、出身と異なる都道府県を選択している場合は「定住移動群」とした。加えて、「就職時に住みたい都道府県をお答えください」に対して出身より人口の多い都道府県を選択し、「人生の中で最後に住みたい都道府県をお答えください」で出身である都道府県を選択している場合は「U ターン群」、３つの質問全てに異なる都道府県を選択している場

合は「全て異なる群」とした。

第 2 項 *t* 検定の分析結果

大学生がもつ属性により、地元愛着度と地元志向度に差が生じているか検証するために、*t* 検定を実施した。統計処理には IBM 社 SPSS statistics25 を用いている。各結果を表 1-1 から表 1-8 に示す。

表 1-1　地元愛着度と地元志向度の性別による比較

	全体（n=132）		女性（n=72）		男性（n=55）		*t* 値	*p*
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
地元愛着度	5.38	1.357	5.35	1.291	5.49	1.318	.616	.539
地元志向度	4.85	1.736	5.01	1.666	4.65	1.838	-1.152	.252

*p<.10,　**p<.05,　***p<.01

表 1-2　地元愛着度と地元志向度の兄弟姉妹の有無による比較

	全体（n=132）		兄弟姉妹無（n=19）		兄弟姉妹有（n=111）		*t* 値	*p*
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
地元愛着度	5.38	1.357	5.00	1.414	5.44	1.34	1.317	.190
地元志向度	4.85	1.736	4.16	1.772	4.98	1.70	1.941	.055*

*p<.10,　**p<.05,　***p<.01

表 1-3　地元愛着度と地元志向度の出身地外へ進学した兄弟姉妹の有無による比較

	全体（n=132）		進学兄弟姉妹無（n=93）		進学兄弟姉妹有（n=37）		*t* 値	*p*
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
地元愛着度	5.38	1.357	5.47	1.299	5.14	1.475	-1.287	.200
地元志向度	4.85	1.736	4.98	1.674	4.57	1.849	-1.225	.223

*p<.10,　**p<.05,　***p<.01

表 1-4　地元愛着度と地元志向度の浪人経験の有無による比較

	全体（n=132）		浪人経験無（n=113）		浪人経験有（n=17）		*t* 値	*p*
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
地元愛着度	5.38	1.357	5.46	1.350	5.12	1.166	- .991	.323
地元志向度	4.85	1.736	4.89	1.729	4.82	1.741	- .156	.876

*p<.10,　**p<.05,　***p<.01

表 1-5　地元愛着度と地元志向度の就職移動の有無による比較

	全体（n=132）		就職移動無（n=59）		就職移動有（n=66）		*t* 値	*p*
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
地元愛着度	5.38	1.357	5.75	1.212	5.08	1.396	-2.850	.005***.
地元志向度	4.85	1.736	5.69	1.235	4.14	1.805	-5.682	001***

*p<.10,　**p<.05,　***p<.01

表 1-6　地元愛着度と地元志向度の定住移動の有無による比較

	全体（n=132）		定住移動無（n=89）		定住移動有（n=35）		*t* 値	*p*
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
地元愛着度	5.38	1.357	5.75	1.048	4.40	1.538	-4.786	.001***
地元志向度	4.85	1.736	5.45	1.382	3.40	1.718	-6.300	.001***

*p<.10，**p<.05，***p<.01

表 1-7　地元愛着度と地元志向度の U ターンの有無による比較

	全体（n=132）		U ターン無（n=89）		U ターン有（n=35）		*t* 値	*p*
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
地元愛着度	5.38	1.357	5.2	1.519	5.74	.795	2.545	.012**
地元志向度	4.85	1.736	4.79	1.895	5.05	1.413	.865	.389

*p<.10，**p<.05，***p<.01

表 1-8　全て異なる都道府県を選択したかどうかによる比較

	全体（n=132）		全て異なる選択無（n=89）		全て異なる選択有（n=35）		*t* 値	*p*
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
地元愛着度	5.38	1.357	5.61	1.190	4.15	1.496	-4.811	.001***
地元志向度	4.85	1.736	5.27	1.503	2.85	1.565	-6.551	.001***

*p<.10，**p<.05，***p<.01

地元愛着度、地元志向度ともに統計的に有意な差が認められたのは、就職移動群（表 1-5）、定住移動群（表 1-6）、全て異なる群（表 1-8）の属性であった。いずれの結果も、就職移動有、定住移動有、全て異なる選択有の群の方が地元愛着度、地元志向度がともに低い値であった。ただし、自身の出身地とは異なる都道府県を、就職時また定住時に選択している群の方が地元愛着度も地元志向度が低い値であるという結果は当然といえば当然である。次に、地元愛着度のみ有意な差が認められた属性は U ターン群（表 1-7）であり、U ターン有の群の方が高い値であった。大学生が U ターンを検討する際には、将来的に地元に住みたいかどうか（地元志向度）は関係ないが、地元に愛着があるかどうか（地元愛着度）は関係があるようだ。反対に、10%水準ではあるが、地元志向度のみ有意な差が認められた属性は兄弟姉妹の有無（表 1-2）であり、兄弟姉妹有の群の方が高い値であった。兄弟姉妹の存在により高められるのは地元に愛着があるかどうか（地元愛着度）ではなく、将来的に地元に住みたいかどうか（地元志向度）であるようだ。

第 3 項 二要因分散分析の結果

大学生がもつ属性による地元愛着度と地元志向度の差について、さらに複雑な構造を検証するために二要因分散分析を行った。二要因分散分析では 2 つの変数が組み合わされることによって生じる効果である交互作用効果について検証した。なお、第 2 項の分析で用いた各変数どうしの交互作用効果について分析を行っている。

表 1-9　地元愛着度に対する二要因分散分析の結果（就職移動群×定住移動群）

	就職移動無			就職移動有			就職移動主効果	定住移動主効果	交互作用
	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD			
定住移動　無	50	5.76	1.222	38	5.74	0.795	.019**	.001***	.024***
定住移動　有	7	5.43	1.272	27	4.11	1.528			

*p<.10，**p<.05，***p<.01

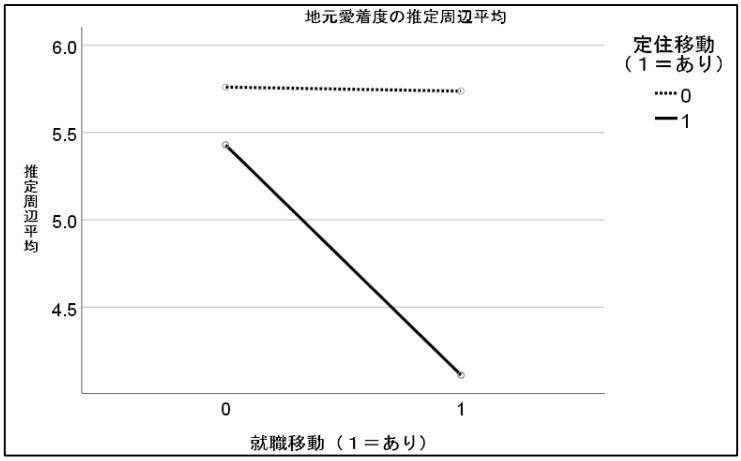

図 1-1 地元愛着度における就職移動群×定住移動群のプロット図

表 1-10　地元志向度に対する二要因分散分析の結果（就職移動群×定住移動群）

	就職移動無			就職移動有			就職移動主効果	定住移動主効果	交互作用
	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD			
定住移動　無	50	5.76	1.302	38	5.05	1.413	.001***	.001***	.009***
定住移動　有	7	5.29	.756	27	2.85	1.537			

*p<.10,　**p<.05,　***p<.01

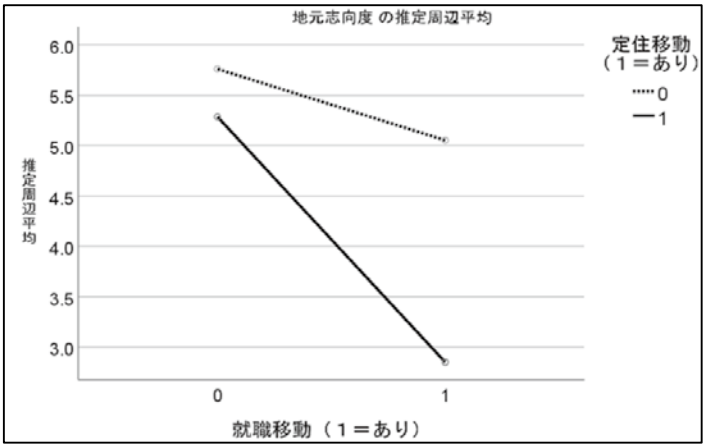

図 1-2　地元志向度における就職移動群×定住移動群のプロット図

表 1-11　地元志向度に対する二要因分散分析の結果（性別×全て異なる都道府県選択群）

	全て異なる選択無			全て異なる選択有			性別主効果	全て異なる選択主効果	交互作用
	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD			
男性	45	4.93	1.737	9	3.33	1.936	.781	.001***	.058*
女性	54	5.56	1.269	10	2.50	1.179			

*p<.10,　**p<.05,　***p<.01

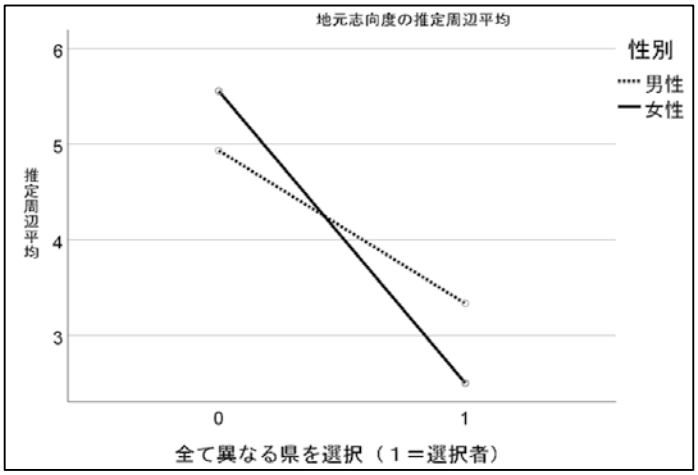

図 1-3　地元志向度に対する性別×全て異なる都道府県選択群のプロット図

表 1-12　地元志向度に対する二要因分散分析の結果（浪人経験×全て異なる都道府県選択群）

	全て異なる選択無			全て異なる選択有			浪人経験主効果	全て異なる選択主効果	交互作用
	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD			
浪人無	88	5.33	1.46	18	2.67	1.534	.191	.008***	.083*
浪人有	14	5.07	1.73	2	4.50	.707			

*p＜.10，**p＜.05，***p＜.01

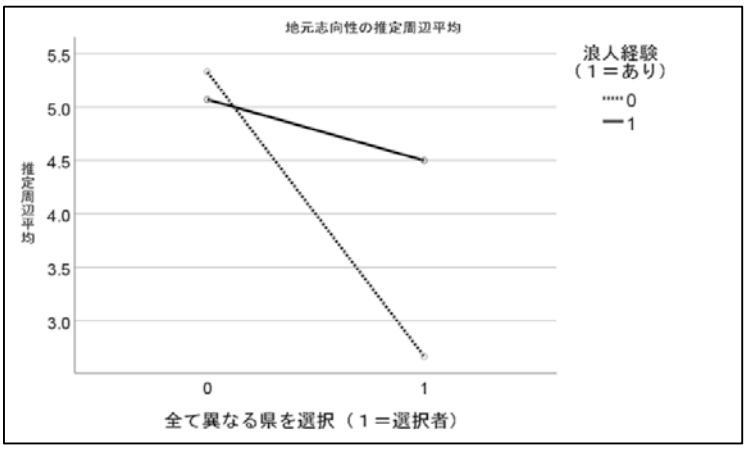

図 1-4 地元志向度に対する浪人経験×全て異なる都道府県選択群のプロット図

表 1-13　地元志向度に対する二要因分散分析の結果（浪人経験×兄弟姉妹の有無）

	兄弟姉妹無			兄弟姉妹有			浪人経験主効果	兄弟姉妹主効果	交互作用
	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD			
浪人無	16	4.44	1.750	95	4.99	1.710	.208	.007***	.079*
浪人有	3	2.67	1.155	14	5.29	1.490			

*p＜.10，**p＜.05，***p＜.01

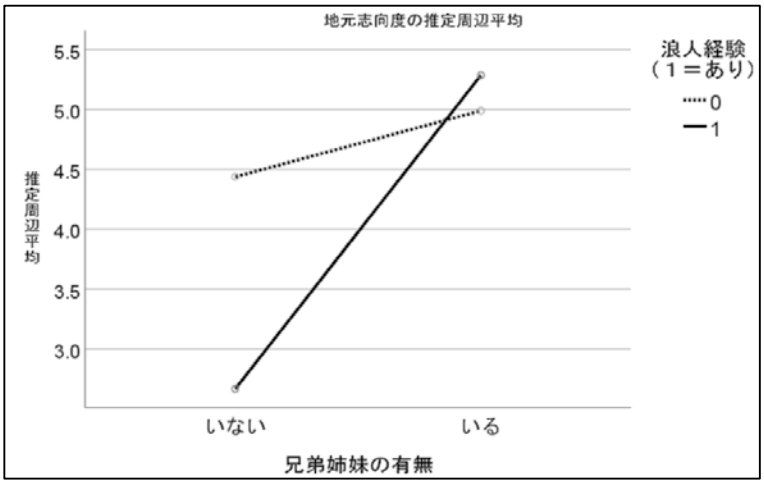

図 1 地元志向度に対する浪人経験×兄弟姉妹の有無のプロット図

地元愛着度と地元志向度ともに統計的に有意な結果を示した変数の組み合わせは、就職移動群×定住移動群（表 1-9、1-10）のみで、10%水準ではあるが地元志向度ついて有意な結果を示した変数の組み合わせは、性別×全て異なる都道府県選択群（表 1-11）、浪人経験×全て異なる都道府県選択群（表 1-12）、浪人経験×兄弟姉妹の有無（表 1-13）であった。なお、地元愛着度のみ有意な結果を示した変数の組み合わせはなかった。

表 1-9 を見ると、地元愛着度に対しては、就職移動の主効果（F= 5.618、p=.019）、定住移動の主効果（F= 11.974、p=.001）とともに、交互作用（F= 5.237、p=.024）も有意な結果を示している。同様に、表 12 から地元志向度に対しても、就職移動の主効果（F= 23.201、p=.001）、定住移動の主効果（F= 16.826、p=.001）とともに、交互作用（F=7.009、p=.009）も有意な結果を示している。 t 検定の結果でも示したが、就職移動と定住移動の主効果の結果は当然といえば当然である。地元愛着度における交互作用の結果は、図 1-1 を見ると、定住移動が無ければ、例え就職移動があったとしても、ほとんど地元愛着度の平均値に差はない（就職移動無＝5.76、就職移動有=5.74）一方で、定住移動がある場合は、就職移動の有無によって地元愛着度の平均値に大きな差（就職移動無＝5.43、就職移動有=4.11）が生じている。地元志向度における交互作用の結果についても同様に、図 1-2 を見ると、定住移動の有無によってその変容の仕方は異なるようである。特に、地元志向度の平均値は定住志向無で就職移動有の場合は、5.05 であるのに対して、定住移動有で就職移動有の場合は 2.85 となっており、下がり幅は地元愛着度に比べて大きいようである。

表 1-11 を見ると、地元志向度に対して、性別の主効果は有意な結果ではないが、全て異なる都道府県を選択群の主効果は（F= 37.642、p=.001）と有意であり、また 10%水準ではあるが、交互作用（F= 3.679、p= .058）も有意な結果を示している。同様に表 11-12 から浪人経験の主効果は有意な結果ではないが、全て異なる都道府県を選択群の主効果は（F= 7.3、p=.008）と有意であり、10%水準ではあるが交互作用（F= 3.053、p= .083）も有意な結果を示している。「あなたの出身県と市区町村をお答えください」、「就職時に住みたい都道府県をお答えください」、「人生の中で最後に住みたい都道府県をお答えください」の３つの質問に対して、全て異なる都道府県を選択することは、例えば単純に知らない土地での生活に憧れている場合や、心から地元を嫌っている場合など様々な状況が考えられるため、特定の状況と断定して考察することは難しい。ただし、表 1-11 と図 1-3 から、女性は就職時、定住時に地元とは異なる都道府県を選択した群は選択していない群と比べて、地元志向度の値が小さくなるということがいえる。同様に、表 1-12 と図 1-4 からは、浪人経験が無い場合、就職時、定住時に地元とは異なる都道府県を選択した群は選択していない群と比べて、地元志向度の値が小さくなるということがいえる。

最後に表 1-13 を見ると、地元志向度に対しては、浪人経験の主効果は有意な結果ではないが、兄弟姉妹の有無の主効果は（F= 7.404、p=.007）と有意であり、また 10%水準ではあるが、交互作用（F= 3.146、p= .079）も有意な結果を示している。浪人経験がある場合、兄弟姉妹がいない群は兄弟姉妹がいる群に比べて、地元志向度の値が小さくなるということがいえる。拡大解釈であるが、兄弟姉妹がいながら、浪人をさせてもらう経験は本人にとってプラスの経験であり、そこから地元志向度に正の影響を及ぼしている可能性もあるのではないだろうか。

第 4 項 考察

t 検定と分散分析の結果からは主に地元志向度の差について有意な結果を示した。地元愛着度の指標としては「あなたは地元に愛着がありますか？」に対する回答を、地元志向度の指標としては「あなたは将来的に地元に住みたいと思いますか？」に対する回答を用いていることを踏まえると、地元への愛着は大学生がもつ属性によってあまり変容することはないが、地元に住みたいかどうかについては、兄弟姉妹の有無や浪人経験などの属性によって変容するようである。また、地元愛着度と地元志向度との相関係数を算出すると.627（p=.001）と両者には強い正の相関が認められた。これらのことを踏まえると、拡大解釈ではあるが、地元愛着度により地元に住みたいか否かが変容しているような構造よりは、周辺の属性等の刺激から地元志向度が揺れ動き、その中で徐々に地元愛着度が形成されているのではないかと考える。また、地元に対する愛着は感情であり、将来地元に住みたいと思うかは行動である。人の感情とは様々な刺激から影響を受けながら少しずつ形成されていくため変動しにくいが、人の行動はするかしないかの 2 択であるため、感情に比べると変動しやすいのかもしれない。もしくは、調査対象である大学生は時間的にも、金銭的にもある程度の自由が認められている時期であるため、感情より行動面を表す地元志向度の方が変動しやすいという結果となった可能性も考えられる。

第 2 節 社会的ネットワークが地元定住/県外定住に与える影響

第 1 項 社会的ネットワークの分析について

本節では定住志向に対する社会的ネットワークの影響を見る。先行研究では、地域のソーシャル・キャピタルに対する満足度が地域への愛着や定住志向へと影響を与えることが示唆されてきた（西村・南條(2017)など）。しかし、どのような人間関係が影響を与えるのかは検討されていなかった。ソーシャル・キャピタルは人々の社会的ネットワークに埋め込まれていることを踏まえれば、具体的にどのような人間関係が地域の定住志向へと影響を及ぼしているのかを検討する必要があるだろう。

以下では、N. Lin(2001=2006)による地位想起法を用いる。地位想起法では様々な地位のリストを提示し、そのような地位に就いている知人の有無を尋ねることで、個人が、ある資源へのアクセスが可能な関係をどれだけ有しているのかを調査することができる。以下では、地位想起法による調査結果をもとに個人の具体的なネットワークの構造を明らかにした上で、将来の定住志向への影響を検討する。

第 2 項 分析

本調査では、調査対象者を囲む社会的ネットワークの構造を把握するために、「家族や親族」「友人や親族など親しい間柄」「知人」にどのような人々がいるのかを尋ねている。具体的には、「予備校の先生」「予備校に通っていた生徒」「予備校に通っていない生徒」「進路指導の先生」「大学生」「小学校の先生」「中学校の先生」「高等学校の先生」「町内会の会長」「地元の消防団の関係者」「農林漁業従事者」「地元の自営業者(農林漁業除く)」「隣の家の人」「医者」「国家公務員」「地方公務員（教員除く）」である。これらの立場の人々が「家族や親族」「友人や親族など親しい間柄」「知人」にいる場合に印をつけてもらった。各項目で印のある関係を 1 点、印がない関係を 0 点として、その和をネットワーク得点とした。

ところで、個人を巡る社会的ネットワークは M.Granovetter(1973)の強い紐帯・弱い紐帯の議論に見られるように、繋がりに強弱を持たせつつ、広がりを見せている。また、個人はネットワーク A と関係する場合もあればネットワーク B と関係を持つこともあり、個人がネットワーク A とネットワーク B をつなぐ唯一の存在であった場合に、M.Granovetter(1973)はその関係性を「ブリッジ」と表現している。この点を踏まえれば、ある個人と関わりのあるネットワーク構造の把握のためには、個人が持つ全体的なネットワークの広がりを把握すると共に、A というネットワークや B というネットワークのように一段階小さなネットワークにも着目する必要があると言える。その上で、そのように分類されたネットワークが個人の行動（今回で言えば定住先の選択）に如何なる影響を与えているのかを検討する必要がある。

このような社会的ネットワークの理論を踏まえれば、量的分析を行うにあたっては主成分分析を用いたネットワーク構造の把握が適していると言える。

主成分分析では変数$(X_1, X_2, \dots, X_n)$の値を以下の式のように加重平均して合成変数を作成する際に、合成変数 Z の分散が$\sum w_i^2 = 1$において最大となる w の組み合わせを求める。

$$Z = w_1X_1 + w_2X_2 + \cdots + w_nX_n$$

この時、Z が第一主成分得点であり、w_i は第一主成分の負荷量ベクトルである。第二主成分を求めるには合成変数 Z は$\sum w_i^2 = 1$の条件に加えて「第一軸に直交する部分空間における分布をみて、その部分空間での分布が最

も広がった方向」(上田,2003,p.29)に対応するものでなければならない。これは第三主成分、第四主成分となるごとに「第一軸と第二軸に直交…」、「第一軸と第二軸と第三軸に直交…」というように制約が増える為、主成分得点 z の分散は第一主成分が最も大きく、第二主成分、第三主成分となるごとに小さくなっていく。

以下では、これら社会的ネットワークと主成分分析の理論的な背景を踏まえた上で、結果を解釈していく。

図 2-1　主成分分析の結果

	全般的ネットワーク	中程度以上の職業階層ネットワーク	同世代ネットワーク
地元の消防団の関係者	.695	-.251	-.225
地方公務員（教員除く）	.677	-.238	.002
小学校の先生	.675	.163	-.062
地元の自営業者（農林漁業除く）	.649	-.141	-.234
高等学校の先生	.578	.473	-.145
農林漁業従事者	.578	-.479	-.142
大学生	.556	.023	.467
中学校の先生	.540	.406	-.182
町内会の会長	.538	.001	-.269
進路指導の先生	.503	.519	-.124
塾予備校に通っていた生徒	.497	-.179	.509
塾予備校に通っていない生徒	.483	-.339	.582
隣の家の人	.458	-.456	-.160
国家公務員	.443	.422	.100
医者	.430	-.066	-.085
塾予備校の先生	.235	.554	.391
固有値	4.758	1.898	1.282
寄与率	.297	.119	.416
累積寄与率	.297	.416	.496

主成分分析の結果を表 2-1 に示す。

第一主成分は全般的に高い値をとっているため、「全般的ネットワーク」と名付ける。なお、上述の通り、第一主成分得点は分散を最も大きくする為、主成分負荷量も全般的に大きな値となっている。

第二主成分は「塾予備校の先生」「進路指導の先生」「中学校の先生」「高等学校の先生」「国家公務員」で高い値を取っているため、「中程度以上の職業階層ネットワーク」と名付ける。

第三主成分は「塾予備校に通っていた生徒」「塾予備校に通っていない生徒」「大学生」で高い値を取っているため、「同世代ネットワーク」と名付けた。

上記のようなネットワークのうち、どれが地域への定住志向に影響を与えるのかを見るため、以下では「人生の最後に住みたい都道府県」が出身地と同じ場合に「1」、違う場合に「0」とした「出身地-将来の定住先一致ダミー」を作成し、従属変数とした。そして独立変数として「全般的ネットワーク」「中程度以上の職業階層ネットワーク」「同世代ネットワーク」に加え、「兄弟ダミー」と「県外進学兄弟ダミー」を加えることで、ソーシャル・キャピタルの影響を検討する。また、個人の属性変数として「性別（男性ダミー）」も入れている。

「出身地-将来の定住先一致ダミー」を従属変数にし、「男性ダミー」「兄弟ダミー」「県外進学兄弟ダミー」「全般的ネットワーク」「中程度以上の職業階層ネットワーク」「同世代ネットワーク」を独立変数し、ロジスティック回帰分析を行った結果が表 2-2 である。

表 2-2 「出身地-将来の定住先一致ダミー」を従属変数としたロジスティック回帰分析の結果

	B		*S.E.*	Exp(B)
男性ダミー	.325		.448	1.383
兄弟ダミー	-.610		.328	.543
県外進学兄弟ダミー	.606		.196	1.834
全般的ネットワーク	.322		.176	1.380
中程度以上の職業階層ネットワーク	-.553	＊	.017	.575
同世代ネットワーク	-.333		.156	.717
（定数）	.385		.371	1.469
N	123			
自由度	6			
p 値	0.035	＊		

注: ＊ *p*<.05

第 3 項 考察

ロジスティック回帰分析の結果から、中程度の職業階層ネットワークが 5%水準で有意な結果を得た。係数が-0.553 の為、学校の先生や国家公務員といった中程度以上の職業階層に就く人々が身の回りにいる人は将来定住する場所として、地元以外を志向することが示唆された。これは、教師や国家公務員等の中程度以上の職業階層ネットワークに囲まれていることで、地元地域に留まらない広い世界を見通すことができる可能性を指摘できる。

また、統計的に有意な結果とはならなかったが、兄弟ダミー、同世代ネットワークが負の係数となっている点は興味深い点といえる。先行研究では、良好な家族関係

や地域の人間関係が地域愛着へ影響を与えている点が指摘されていた。しかし、本分析では係数がマイナスである為、兄弟の有無や同世代ネットワークによって地元とは異なる地域への定住志向の可能性がうかがわれる。もちろん、本研究はサンプル数が少ない点や大学生のみに調査を行っている点もあるため、今後、より多くのサンプルサイズを確保したうえで、具体的なネットワークに迫っていく必要があるだろう。

第 3 節 住みたい/帰りたいまちにはどんな違いがあるのか

第 1 項 問題・目的

人々が「住みたい」と思うまちの条件は様々なものが考えられる。子育てのしやすさ、仕事場への近さ、生活利便性、自然の豊かさ、地域の良好な人間関係、人によって様々であろう。人が集まるまちをつくるにはどのような条件を押さえておけばよいのか。本節では、住みたいまち尺度を作成する。また、人々が住みたいまちに求めるものと、地元愛着度・地元志向度との関連について調べ、「帰りたい」と思うまちと実際に「住みたい」と思うまちの違いについても検討する。

第 2 項 考察

本調査は 141 名からの回答を得た。そのうち欠損値を除いた 132 名分の回答を分析に用いる。まず、「強く求める」を 4、「少し求める」を 3、「あまり求めない」を 2、「全く求めない」を 1、として得点化した。これら 17 項目すべてを用いて因子分析（主因子法、プロマックス回転）を実施した。

表 3-1　住みたいまち尺度因子分析結果

	パターン行列			共通性
	コミュニティ重視 (α=.843)	まちの暮らしやすさ重視 (α=.728)	自然環境重視 (α=.707)	因子抽出後
9 ． 地域の人のコミュニティ参加が活発である。	.949	.018	-.062	.844
3 ． 町内会が活発に動いている。	.831	-.053	-.096	.621
6 ． 伝統的な地域行事が多い。	.720	-.027	.066	.572
12 ． 日頃から近所の人と気軽に挨拶や会話が交わせる。	.549	.162	.138	.434
4 ． 最寄り駅が徒歩 10 分圏内にある。	-.075	.723	-.041	.524
2 ． 徒歩 10 分圏内にスーパーがある。	-.085	.689	.038	.488
10 ． 歩道がきれいに整備されている。	.113	.587	.125	.411
1 ． 乗ろうと思ったバスが 15 分以下の間隔で来る。	.001	.550	-.078	.295
8 ． 街灯が整備されている。	.190	.455	-.089	.222
13 ． 道端に緑が多く、自然を感じることができる。	.112	-.035	.802	.741
11 ． 小さな生き物の気配を感じる。	.039	-.103	.724	.542
16 ． 近隣の交通量が少ない。	-.117	.018	.503	.209
17 ． 近隣に広い公園がある。	.071	.021	.445	.239
15 ． 近隣の騒音が少ない。	-.142	.248	.319	.161
寄与率(%)	24.289	14.051	6.679	
累積寄与率(%)	24.289	38.341	45.019	
因子間相関　コミュニティ重視	1.000	.007	.518	
まちの暮らしやすさ重視	.007	1.000	.518	
自然環境重視	.518	.158	.518	

その結果、固有値1以上の因子が5つ認められた。固有値の推移は第1因子から順に3.909,2.787,1.564,1.363,1.115…であり、スクリー基準からは3因子構造とも考えられた。そこで3因子を中心に抽出する因子数を変えながら結果を検討し、より単純構造に近く、解釈もしやすいことから最終的に3因子を抽出した。さらに、いずれの因子にも高い負荷量を持たない項目、複数の因子に同程度負荷していた2項目を削除し、再度3因子を指定した因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。回転後の結果を表3-1に示す。

第1因子は「地域の人のコミュニティ参加が活発である」「日頃から近所の人と気軽に挨拶や会話が交わせる」などの項目が高い因子負荷を示しており、住む地域のコミュニティに関連した内容の項目群と言える。町内会や地域行事などを重視していることから、コミュニティのつながりを強めるものを大切にしていると伺える。そこで、「コミュニティ重視」の因子と命名する。

第2因子は「最寄り駅が徒歩10分以内にある」「徒歩10分圏内にスーパーがある」などの項目が高く負荷しており、生活利便性を求めている項目群のようだ。また「歩道がきれいに整備されている」「街灯が整備されている」というまちの安全性やきれいさも意識している項目もあり、「まちの暮らしやすさ重視」の因子と命名する。

第3因子は「道端に緑が多く、自然を感じることができる」「小さな生き物の気配を感じる」などの項目が高く負荷した。また、「近隣の交通量が少ない」といった項目も共に高く負荷していたため、交通量が多い都心よりも自然が多い静かな環境を求めていると考えられる。よってこの因子を「自然環境重視」の因子と命名する。

以上のような因子分析の結果を踏まえ、3つの因子の組み合わせについて、色々なパターンが想定される。因子の組み合わせについてどのような傾向があるのか調べるため、Ward法によるクラスター分析を行い、解釈可能性により6つのグループに分けられた。クラスター分析の結果を表3-2に示す。

クラスター1はまちの暮らしやすさ重視の因子の平均値が高く、他の二つの因子の平均値が低い。よってクラスター1は自然やコミュニティよりも暮らしやすさを重視するグループである。クラスター2はコミュニティ重視の因子と自然環境重視の因子の平均値が高く、まちの暮らしやすさ重視の因子が低かった。クラスター1とは相反するようなグループである。クラスター3はコミュニティ重視の因子が特に高く、まちの暮らしやすさ重視の因子が特に低く出ていた。クラスター4はどの因子もあまり効いていなかったが、まちの暮らしやすさ重視の因子の平均が最も高かった。クラスター5はコミュニティ重視の因子と暮らしやすさ重視の因子の平均値が高く、自然環境重視の因子が低かった。クラスター6はどの因子の平均も低くなっていた。これらの6グループと地元愛着度、志向度との関係性をみるため、地元愛着度と志向度について、クラスター分析で出てきた6グループを要因とする1要因分散分析を行った。

表 3-2 クラスターの特徴

クラスター		第1因子（コミュニティ重視）	第2因子（まちの暮らしやすさ重視）	第3因子（自然環境重視）
1	度数	18	18	18
	平均値	-1.020	0.319	-1.327
	標準偏差	0.594	0.527	0.518
2	度数	22	22	22
	平均値	0.964	0.335	1.039
	標準偏差	0.587	0.493	0.300
3	度数	22	22	22
	平均値	0.849	-1.030	0.318
	標準偏差	0.733	0.575	0.617
4	度数	47	47	47
	平均値	-0.583	0.127	0.060
	標準偏差	0.434	0.640	0.620
5	度数	19	19	19
	平均値	0.506	0.576	-0.189
	標準偏差	0.276	0.398	0.350
6	度数	2	2	2
	平均値	-1.873	-3.665	-2.591
	標準偏差	0.081	0.281	0.602
合計	度数	130	130	130
	平均値	.000	.000	.000
	標準偏差	0.954	0.881	0.909

また、分散分析の結果を表3-3に示す。

表 3-3 分散分析の結果

	平方和	平均平方	F値	有意確率	多重比較
愛着度(グループ間)	29.779	5.956	3.547	.005	クラスター1<クラスター2, クラスター1<クラスター5
志向度(グループ間)	25.193	5.039	1.699	.140	

分散分析の結果、地元愛着度のみで5%水準の有意差が認められた。Tukey法による多重比較（5%水準）を行った結果、クラスター1と2、1と5の間に有意な差が認められた。表3-2におけるクラスター1, 2, 5について見てみると、クラスター1については「まちの暮らしやすさ重視」の因子の平均値が他2つの「コミュニティ重視」

「自然環境重視」の因子の平均値よりも高い。またクラスター2 については「コミュニティ重視」「自然環境重視」の因子の平均値が高く、「まちの暮らしやすさ重視」は低い。クラスター5 については「コミュニティ重視」「まちの暮らしやすさ重視」の因子が高く、「自然環境重視」が低い。地元に愛着がある要因として一つの要因を特定することはできないが、暮らしやすさ、地域コミュニティ、自然などが複雑に絡み合うことで愛着という感情に繋がるようだ。また、暮らしやすさやコミュニティ、自然環境いずれを重視するかは対立するグループがあった為、それぞれ好みが分かれると考えられるが、圧倒的にコミュニティを重視するグループがあった為、地域コミュニティの良さが、愛着に繋がる人が多いのではないか。ただ、ここでさらに注目したいのは、地元愛着の要因として、コミュニティよりもまちの暮らしやすさを重視するグループと、まちの暮らしやすさよりもコミュニティを重視するグループの人数においてあまり差がなかった点である。結果として、地元愛着には地域コミュニティの重要性が示唆されたが、その裏には地元愛着を決める要因がより複雑な構造を持っているようだ。地元愛着を醸成するには、コミュニティが大事、という仮定は様々な過程があっての結果論なのかもしれない。

また、地元志向度は要因の傾向が見えづらく、特定の一基準のみで決めるのは難しい。愛着よりもさらに要因が複雑に絡まり合っている可能性がある。「帰りたい」と「住みたい」にはその規定要因の複雑さに差異がある。

第 4 節 地元愛着度や地元志向度に、学校行事での経験も関係するのか？

本節では、前節の「住みたいまち尺度」に加えて、高校時代における学校行事での経験についても、地元愛着度や地元志向度に影響するのか検討を行っていく。「住みたいまち尺度」を現時点における居住地に関する選好と考えると、高校時代における学校行事での経験は過去における実際の経験である。このように現時点の選好と過去における実際の経験の両面から、地元愛着度や地元志向度について検討していく。

第 1 項 因子分析

高校時代における学校行事での経験について Q26 で尋ねた。Q26 では「あてはまらない」を 1、「どちらかというとあてはまらない」を 2、「どちらでもない」を 3、「どちらかというとあてはまる」を 4、「あてはまる」を 5 として得点化した。この Q26 の 17 項目全てを用いて因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。

因子分析の結果、固有値が 1 以上の因子が 3 つ認められた。固有値の推移は、第 1 因子から順に 7.008、1.884、1.057、･･･であった。スクリープロットや解釈のしやすさから、最終的に 2 因子を抽出することが適当であると判断した。さらに、因子抽出後の共通性が低い項目やいずれの因子にも高い負荷量を持たない項目の 2 項目を削除して、再度 2 因子の抽出を指定して因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。この再度行った因子分析の結果を表 4-1 に示す。

第 1 因子は学校行事での頑張りや達成感、貢献に関する項目群といえる。そこでこの因子について「学校行事への貢献・頑張り」の因子と命名する。クロンバックのアルファについては.919 であり、これは十分な内部一貫性を有したものといえる。

第 2 因子は「学校行事にあたり自分が地域の人々に支えられていることを感じた」や「学校行事を通じて地域の思い出ができた」など学校行事を通した地域との繋がりに関する項目群といえる。そこでこの因子について「学校行事を通じた地域との繋がり」の因子と命名する。クロンバックのアルファは.830 であり、これは十分な内部一貫性を有したものといえる。

以上の因子分析の結果を踏まえて、抽出した 2 つの因子を因子得点として、今後の分析に用いていく。

表 4-1　高校時代における学校行事での経験(Q.26)の因子分析結果

	パターン行列		共通性	記述統計量	
	学校行事への貢献・頑張り（α=.919）	学校行事を通じた地域との繋がり（α=.830）	因子抽出後	平均値	標準偏差
10.自身の学校行事に対する頑張りを高く評価することができる	.833	-.045	.656	3.62	1.063
16.学校行事には積極的に参加した	.785	.013	.628	3.94	1.162
14.妥協することなく学校行事に取り組むことができた	.764	.021	.601	3.58	1.102
2.学校行事にやりがいを感じていた	.759	.103	.670	3.90	1.003
1.自分の取り組みは、学校行事に貢献できたと思う	.735	-.204	.423	3.75	1.037
3.学校行事に自分の全力を出すことができた	.725	.102	.615	3.73	1.104
8.学校行事について自分に与えられた仕事や役割をしっかりとこなした	.679	-.134	.382	4.24	0.842
6.仲間と協力して学校行事に取り組むことができた	.649	.033	.445	4.28	0.854
15.学校行事に関する活動にあたり目標をたて、その達成に向けて努力した	.643	.143	.532	3.67	1.084
12.学校行事は充実したものであった	.639	.015	.419	4.14	0.990
17.学校行事を通じて仲間との絆が強くなった	.549	.094	.365	4.06	1.068
13.学校行事にあたり自分が地域の人々に支えられていることを感じた	-.153	.856	.618	2.80	1.244
9.学校行事を通じて地域の思い出ができた	-.087	.817	.600	2.55	1.256
4.行事本番に来られる地域の方々のことを想像して活動に取り組んだ	.084	.676	.525	2.52	1.175
5.学校行事を通じて学校への愛着は強くなった	.172	.616	.522	3.36	1.243
寄与率（%）	43.709	9.624			
累積寄与率（%）	43.709	53.333			
因子間相関　学校行事への貢献・頑張り	1	.532			
因子間相関　学校行事を通じた地域との繋がり	.532	1			

第 2 項 重回帰分析

以下では、地元愛着度や地元志向度に対して、住みたいまち要因や高校時代の学校行事の経験が与える影響があるのかを検討するために、重回帰分析を行った。

重回帰分析では、Q24 の「あなたは地元に愛着がありますか？」を「地元愛着度」Q25 の「あなたは将来的に地元に住みたいと思いますか？」を「地元志向度」として従属変数とした。独立変数としては、Q1 の性別を尋ねた項目から男性を 1、女性やその他を 0 とした「男性ダミー」、Q5 の所属する学部を尋ねた項目から文学部、法学部、経済学部、教育学部を 1 とし、共創学部を含むその他学部を 0 とした「文系ダミー」、Q14 の浪人を経験した回数を尋ねた項目から、1 以上を 1、0 の浪人経験なしを 0 とした「浪人ダミー」、Q16 の資格取得の希望の有無を尋ねた項目から希望有りを 1、希望無しを 0 とした「資格取得希望ダミー」、Q20 の「あなたは将来結婚したいと思いますか」（結婚願望）、Q21 の「あなたは将来出世したいと思いますか」（出世願望）、第 3 節において Q22 の「住みたいまち要因」から抽出した 3 因子の因子得点、本節の「1. 因子分析」で作成した高校時代の学校行事の経験から抽出した 2 因子の因子得点を用いる。

なお、以下の重回帰分析は、上記の独立変数から高校自体の学校行事の経験から抽出した 2 因子の因子得点を除いたものをモデル 1、上記の従属変数を全て投入するものをモデル 2 とした階層的重回帰分析の形で行う。

重回帰分析の結果を表 4-2 と 4-3 に示す。

まず、表 4-2 の地元愛着度（Q24）を従属変数とした重回帰分析の結果を見ていく。モデル 1 については 5%水準で、モデル 2 については 1%水準で、それぞれ回帰式は有意であった。自由度調整済み決定係数を見ると、モデル 1 では.098 であったのに対し、モデル 2 では.120 と上昇しているため、地元愛着度を表すモデルとしては、学校行事の経験の 2 因子を投入したモデルの方がよく説明できている可能性が高いと考えられる。モデル 2 においては、「浪人ダミー」（β=-.183, p=.043）、「結婚願望」（β=.158,p=.095）、「住みたいまち要因（コミュニティ重視）」（β=.313,p=.006）、「学校行事での経験（行事を通じた地域との繋がり）」（β=.227,p=.039）の変数が有意であった。なお、表 4 における VIF は全て 1.000~1.700 程度であり、多重共線性の問題はないと考えられる。

次に、表 4-3 の地元志向度（Q25）を従属変数とした重回帰分析の結果を見ていく。回帰式について、モデル 1 はp=.100 となり 10%水準でも有意でなかったのに対し、モデル 2 は 10%水準で有意であった。自由度調整済み決定係数を見ると、モデル 1 が.050 であったのに対し、モデル 2 は.063 と上昇している。その為モデル 1 の回帰式が 10%でも有意でないことと併せて、地元志向度を表すモデルとしては、学校行事の経験の 2 因子を投入したモデルの方がよく説明できている可能性が高い。モデル 2 においては、「学校行事での経験（学校行事を通じた地域との繋がり）」（β=.211,p=0.63）の項目のみが有意であった。なお、表 4-3 における VIF はすべて 1.000~1.700 程度

であり、多重共線性の問題はないと考えられる。

図 4-2 重回帰分析で用いる変数の記述統計

独立変数	モデル1				モデル2			
	非標準化係数	標準化係数	有意確率	VIF	非標準化係数	標準化係数	有意確率	VIF
(定数)								
男性ダミー	.164	.064	.526	1.321	.198	.076	.456	1.416
文系ダミー	-.146	-.056	.576	1.317	-.048	-.018	.856	1.362
浪人ダミー	-.640	-.170	.061 *	1.070	-.685	-.183	.043 **	1.074
資格取得希望ダミー	.076	.028	.780	1.330	.035	.013	.897	1.349
結婚願望（問20）	.146	.141	.132	1.142	.163	.158	.095 *	1.190
出世願望（問21）	-.033	-.029	.770	1.305	-.020	-.017	.862	1.345
住みたいまち要因（コミュニティ重視）	.471	.349	.002 ***	1.603	.422	.313	.006 ***	1.653
住みたいまち要因（まちの暮らしやすさ重視）	.053	.036	.712	1.276	.010	.007	.947	1.303
住みたいまち要因（自然環境重視）	-.087	-.062	.589	1.713	-.051	-.036	.751	1.736
学校行事での経験(学校行事への貢献・頑張り)					-.111	-.082	.470	1.724
学校行事での経験(行事を通じた地域との繋がり)					.312	.227	.039 **	1.599
自由度調整済みR2乗	.098				.120			
F値	$F(9,110)=2.442, p<0.05$				$F(11,108)=2.470, p<0.01$			
n	120				120			

$^{*}p<.10$, $^{**}p<.05$, $^{***}p<.01$

図 4-3 地元愛着度（Q24）を従属変数とする重回帰分析の結果

独立変数	モデル1				モデル2			
	非標準化係数	標準化係数	有意確率	VIF	非標準化係数	標準化係数	有意確率	VIF
(定数)								
男性ダミー	-.507	-.148	.154	1.321	-.498	-.145	.173	1.416
文系ダミー	-.224	-.065	.529	1.317	-.114	-.033	.750	1.362
浪人ダミー	-.338	-.068	.466	1.070	-.394	-.079	.393	1.074
資格取得希望ダミー	-.242	-.067	.517	1.330	-.301	-.084	.419	1.349
結婚願望（問20）	.146	.106	.268	1.142	.174	.127	.192	1.190
出世願望（問21）	-.151	-.100	.329	1.305	-.127	-.084	.415	1.345
住みたいまち要因（コミュニティ重視）	.233	.130	.254	1.603	.180	.100	.381	1.653
住みたいまち要因（まちの暮らしやすさ重視）	-.260	-.135	.185	1.276	-.309	-.160	.117	1.303
住みたいまち要因（自然環境重視）	.267	.143	.225	1.713	.313	.167	.155	1.736
学校行事での経験(学校行事への貢献・頑張り)					-.196	-.109	.353	1.724
学校行事での経験(行事を通じた地域との繋がり)					.386	.211	.063 *	1.599
自由度調整済みR2乗	.050				.063			
F値	$F(9,110)=1.691$				$F(11,108)=1.727, p<0.1$			
n	120				120			

$^{*}p<.10$, $^{**}p<.05$, $^{***}p<.01$

第 3 項 考察

以上の分析を踏まえて、地元愛着度や地元志向度に、住みたいまち要因や高校時代の学校行事の経験が与える影響について考察する。

まず、地元愛着度については、表 4-2 のモデル 2 の結果から、「住みたいまち要因（コミュニティ重視）」、「学校行事での経験（行事を通じた地域との繋がり）」については標準偏回帰係数の値が正で、その値も他の変数と比較し高いことから、住みたいまちを選択する基準として地域における人間関係の結びつきの強さを重視する者や学校行事を通して地域との繋がりを感じた経験がある者ほど、地元愛着度が高くなる傾向にあると考えられる。また、結婚願望についても標準偏回帰係数の値が正であり、結婚願望が強い者ほど地元愛着度が高い傾向にあることが見られる。一方で「浪人ダミー」の標準偏回帰係数が負の値をとっていることから、浪人を経験した者は地元愛着度が下がる傾向にあることが考えられる。このことは、浪人を経験し、地元を離れたより高いレベルの大学を目指すことが原因として考えられる。

次に、地元志向度については、表 4-3 のモデル 2 の結果から、「学校行事での経験（学校行事を通じた地域との繋がり）」のみが有意であり、高校時代における学校行事を通して地域との繋がりを感じた者ほど、地元志向度が高い傾向にあると考えられる。

以上を踏まえて地元愛着度と地元志向度の違いについて考察すると、地元愛着度は地元に対する愛着という感

情を、地元志向度は将来において実際に地元に帰るという行動が伴うという面が大きいのではないだろうか。住みたいまち要因は現時点での居住地選択の個人の選好であり、一方で高校時代における学校行事での経験は過去における個人の経験や思い出と言える。即ち、地元愛着度という感情に関しては現時点の選好や過去の個人の経験・思い出が影響する傾向があるが、実際に将来における地元へ帰るという具体的な行動を伴う地元志向度については、現時点での選好では足らず、過去における具体的な経験等が必要であることが指摘できるのではないか。

結語　「地元を出る/帰る」動機の考察

地元を出る/帰るの動機は、より複雑ではないかという仮説があった。そこで地元に対する愛着度と将来的な定住志向度について、要因を分析した。

第 1 節では、愛着度に対して、様々な要因の差が見られなかった為、愛着を測定することの難しさが示唆された。第 2 節では社会的ネットワークと定住志向の関係について、地元の社会的ネットワークの中の人々の内、中程度以上の職業階層ネットワークが地元/県外定住志向に影響を及ぼすことが見えてきた。第 3 節では地元愛着には地域コミュニティが関わる点や、その裏により複雑な構造があることが見えてきた。クラスターが 6 つに分かれていたこと、コミュニティを重視するクラスターと重視しないクラスターがそこまで人数が変わらなかったことからも伺えた。第 4 節では個人の選好や学校での経験や思い出が愛着度や志向度に及ぼす影響について愛着を醸成するためのアプローチと、行動を伴う志向度を高めるためのアプローチは異なってくるのではないか。

地元に帰ってきてもらうには地元への愛着をもってもらう為の地域づくりが重要であり、またその愛着を醸成するには地域コミュニティを充実させる必要があるのではないか。先行研究でもコミュニティ形成や、人材育成、ソーシャル・キャピタルなどの重要性を指摘しているものが多く、地域づくり＝属人的というような描き方がされているが、もしその主張が成り立つとすると、地域づくり実践を別地域で応用すること自体が難しくなる。しかし、そうとも限らない可能性が今回の調査から見えてきた。まず、地元に残ったり、帰ってきて住んでもらったりするには、地元への愛着度を醸成すれば良いという単純な問題ではない。志向度と愛着度は構成する要因が異なっている。

また、愛着度を決めるものは複雑で、測定することは難しい。故に、よりよい地域づくりに地域コミュニティが重要であることは、複雑な構造を裏に持った結果的なものである、と考えられる。属人的なものだけではないということは、他に如何なる要因があるのか。それはどの地域でも言えることなのか。今回の調査ではそこまでは見えてこなかった。今後はコミュニティに依らない様々な要素を組み込んだ調査紙を作成する必要がある。

＜注＞

(1) 本分析は、九州大学大学院教育学部教育学系において、令和 3 年度通年金 3 限に開講された「教育調査法 1 演習」「教育調査法 2 演習」で行われた。

引用文献

小塚みすず,2009,「定住意識に影響を与える個人属性および地区環境の要因に関する研究」『都市計画報告集』No7

中村省吾・星野敏・中塚雅也,2009,「地域づくり活動展開におけるソーシャル・キャピタルの影響分析」『農村計画学会誌』27 巻,pp.311-316

Nan Lin,2001, Social Capital: A Theory of Social Structure and Action by Nan Lin, Cambridge University Press（＝筒井淳也・石田光規・桜井政成・三輪哲・土岐智賀子(訳),2008,『社会関係資本社会構造と行為の理論-』ミネルヴァ書房）

新里早映・中島正裕・安藤光義,2018,「農村地域における住民の地域愛着に影響を及ぼす要因分析：山口県長門市俵山地区を事例として」『農村計画学会誌』37 巻 Special Issue 号

西村健・南條隆彦,2017,「若者から見た地域への愛郷心・愛着と帰巣性の関係～島田市の高校生アンケート調査等から見た地方創生の可能性～」『公共コミュニケーション研究』第 2 巻 1 号,pp.38-43

総務省地域力創造グループ過疎対策室,2017,「過疎対策の現状と課題」https://www.soumu.go.jp/main_content/000513096.pdf(最終閲覧日:2022/2/3)

総務省地域力創造グループ過疎対策室,2020,「過疎地域等における集落の状況に関する現状把握調査報告書」https://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01gyosei10_02000066.html(最終閲覧日:2022/2/3)

鈴木春菜・藤井聡,2008,「『消費行動』が『地域愛着』に及ぼす影響に関する研究」『土木学会論文集 D』Vol64,No2,pp.190-200

富沢木実,2013,「海士町にみず『地域づくり』の本質」『地域イノベーション』法政大学地域研究センター,pp.65-78
上田尚一,2003,『講座情報をよむ統計学　主成分分析』朝倉書店